☆主の降誕[夜半](12月25日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読（イザヤの預言 9 章 1-3、5-6 節）

闇の中を歩む民は、大いなる光を見
死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。
あなたは深い喜びと大きな楽しみをお与えになり
人々は御前に喜び祝った。刈り入れの時を祝うように
戦利品を分け合って楽しむように。
彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を
あなたはミディアンの日のように折ってくださった。
ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。
ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。
権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神
永遠の父、平和の君」と唱えられる。
ダビデの王座とその王国に権威は増し平和は絶えることがない。
王国は正義と恵みの業によって今もそしてとこしえに、
立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。

第二朗読（使徒パウロのテトスへの手紙 2章11～14節）

愛する者よ、すべての人々に救いをもたらす神の恵みが現れました。
その恵みは、わたしたちが不信心と現世的な欲望を捨てて、この世で、
思慮深く、正しく、信心深く生活するように教え、また、祝福に満ちた希望、
すなわち偉大なる神であり、わたしたちの救い主であるイエス・キリストの
栄光の現れを待ち望むように教えています。
キリストがわたしたちのために御自身を献げられたのは、わたしたちを
あらゆる不法から贖い出し、良い行いに熱心な民を御自分のものとして
清めるためだったのです。

福音朗読（ルカよる福音書　2章　1～14節）

　そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。
　ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。
ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。
　その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。
恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。
今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。
この方こそ主メシアである。
あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」
すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。
「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

　皆さま、主の降誕のお祝い申し上げます。実質五週間の長い待降節でしたが、ようやくたどり着きました。今夜も当時と変わらず寒い夜です。星がキラリリと輝く夜です。何も特別のことではない夜に幼子イエスは産声を上げられました。何も普通と変わらない夜に静かに神の計画は進められていたのです。起きていたのは数人の羊飼いたちだけでした。しかし、イエスがお生まれ

になられたベツレヘムは大勢の旅人が訪れていてごった返していたのです。対照的な状況です。誰もこんなうるさくて人であふれかえっているところで救い主が生まれるなどとは考えもしなかったでしょう。神のなさることには不思議がいっぱいです。この誰も想像だにしない状況以上に驚くべきことは、神の独り子が人となって私たちのところに、小さな赤ちゃんとして生まれてこられたことなのです。それこそ誰一人想像できなかったことなのです。

第一朗読（イザヤの預言 9 章 1-3、5-6 節）

イザヤは主なる神の力強さと人間の救いを成し遂げようとする情熱を描いています。イザヤが預言した時代よりはるか後にこの預言が成就するわけですが、イザヤはまるで目の前でこの出来事を見ているかのように表現しています。この時のイザヤの心はいったいどんなだったのでしょうか。イザヤ預言者に聞いてみたい気がします。6 節の文章の終わりが「‥成し遂げる。」となっているのは神の意志の強さを表しているようでとても頼もしいですね。神は約束を必ず果たされる方なのです。

第二朗読（使徒パウロのテトスへの手紙 2章11～14節）

パウロは自分の愛弟子であるテトスに自分が信じ確信を持っているイエスに対する信仰を力強く伝えています。「キリストが私たちのためにご自身を捧げられたのは、私たちを贖い出し、‥ご自分のものとして清めるためだった」と。その救い主イエス・キリストが現れましたとパウロは誇らしげに宣言しているのです。イエス・キリストに捕らえられたパウロは当時持っていたあらゆる教養、財産、特権などを投げ捨てて、この救いの恵みをより多くの人に、特に異邦の人々に伝えようと奔走していたのです。そしてその活動は実を結び、この私たち日本にも届いたのです.

福音朗読（ルカよる福音書 2章 1～14節）

このルカによる福音を読むときにいつも感心させられるのは、この福音の記述によって当時の状況が手に取るように味わえるからです。幼稚園で

上演される聖劇は、子どもにさえわかるその描写力がもとにあるためです。今日読まれる福音の前半はイエスの誕生のシーンです。出産のできる場所さえなかったところでイエスはお生まれになられたのです。ロバや牛、ヒツジなどは鳴きわめく洞穴で生まれたイエス。ヨセフはイエスを生んだマリアのために泊る場所を用意できなかったことを悔やんでいたかもしれません。マリアは出産の苦しみでひどい場所や寒さなども考える瞬間もなかったでしょう。私たちの慌ただしい毎日の、トラブル続きの生活の中にイエスはお生まれになられるのです。福音の後半は静かな夜の荒れ野で羊飼いたちが羊の番をしているときに天使たちが現れて「救い主の誕生」を告げるのです。この重大極まる知らせもほんの一握りの羊飼いたちに知らされただけでした。事の重大さを必死に抑えているような書き方です。そうでしょう、この出来事はどんな言葉で表現しようとも人間にはできないことだからです。人は黙るしかなかったのです。世界は黙るしかなかったのです。言葉を失ったのです。

この夜の片隅で主イエスはお生まれになった。

P.S.

世の中のクリスマスは騒がしい。そんなクリスマスは嫌だ。しかしその騒がしさの中にも主イエスはお生まれなさった。神のなさることは不思議だ。人は決めつけたがるが、神はどうにかして人間を救おうともがかれている。この神の不思議さ、この神の情熱。

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光